

日系アメリカ人の個人史をつむぐ —8人のインタビュー記録—

5. ヘンリー・S・ヤスダ さん

プロフィール

1928年 カリフォルニア州ロサンゼルス生まれ。1938年、親が教育のためにと日本の山口県へ一時帰国させる。1948年アメリカへもどる。1953年アメリカ軍に徴兵され、1953年~1955年まで朝鮮戦争に従軍。1955年~1956年までアメリカの国防省の仕事で東京に滞在勤務〔貿易と外交を担当〕 信仰: 仏教(浄土真宗)



第二次大戦の勃発の時、私は日本にいた1930年代に生まれた日系アメリカ人の多くは日本で教育を受けさせるために日本に送られた。私もその一人だったのですが、家族の中で自分だけが日本にいたのです。戦争前にアメリカに帰っていった者もいれば、戦中・戦後にアメリカに帰国した者もいる。この人たちを「帰米二世」といって、日本の伝統文化も学び、アメリカの社会に育った彼らは日米の重要な橋渡しの役割を果たしているのです。二世が一番苦しい立場に置かれた人々なのです。戦争が始まって一世と三世の間の二世が一番犠牲になっているといえるのです。二世の人々がアメリカ軍に志願しようとしたときに、その親は日本人でありながらアメリカ軍に入ることを強く責めることもあったのです。事実戦場で兄弟が別れて日本軍とアメリカ軍の両方に属しながら戦場で戦うという悲劇が起こっていたのです。親の絆の強い日本とアメリカへの忠誠を誓う二世との親子の断絶という問題があったのです。さらに三世は完全にアメリカの社会に育ったことで、やはり二世が一番狭間の中で悩み苦しんだと言えるのです。

収容所体験は日系人の意識を大きく変えました。強制収容の事実そのものをアメリカ国内でまだ認めない人もいます。強制収容所にいれた体験をしたのは一世とその子どもです。一世の人々は自分たちが強制収容所に入れられたのは反米運動を起こしたという嫌疑をかけられたからですが、そういうことが無かったとしても、日本人は連対意識が強いので、もしかしたらそういう情報を流した者がいたのではないかという全体責任の意識を強くもっ

ている人がいる。罪を犯した人がいた場合には、法律よりも日系人の社会の制圧の方がつよかったと聞いたことがあります。それは法に罰せられるよりも恥として厳しく罰せられたそうです。多くの日本人の社会には黙って仕方がないという苦渋を堪え忍んだという事でしょう。

次の世代の二世も一世の気持ちを受け継いでアメリカ社会で初めからやりなおすという意識で一生懸命に頑張ってきたのです。いわゆる「服従的な日本人」(Quiet Japanese)とよばれている人々の持っている美徳意識なのです。でも三世になると彼らはアメリカ社会の教育で育ち、罪を犯していないのになぜ日本人たちは公聴会もなく裁判もなく強制収容されたのかという事実を追究していったのです。戦争が終わって再び生きる道を日本に求めたのです。戦争はいったん始まれば、やはり「日本人」としてあることを意識せざるを得なくなります。結局のところ髪が黒い限り日本人であると見られるのです。戦争が終わって収容所からで出た日本人の中には、なんとか日本的な要素を取り払ってアメリカ人以上にアメリカ社会にとけ込もうと努力した人々もいました。私の友達も仏教からキリスト教に変わり、日本学校に通わせていた子どもとアメリカの学校に変えたりしたのです。

でもだんだんアメリカが戦後復興していく時期になり、アメリカ社会の家庭崩壊の危機が問題になってくると、それを見た多くの二世たちは、アメリカ的な教育をしていることへの不安が募ってきたわけです。自分たちの子どもたちの育てかたに関してどこによりどこを求めるべきかと考えるようになったのです。その当時日本も徐々に経済復興がなされるようになるとすべてに日本を否定しのです。いわゆる U ターン現象といってもいいですね。

インタビュー：2006年8月12日(全米日系人博物館にて、日本語)